

# ● 四 国 岸 啓 子

オペラ関連では香川と高知で地元になんだ創作オペラの再演が続いた。『扇の的』（四国二期会第43回公演高松市 指揮：守山俊吾 演出：十川稔 装：林、國方 与一：八木、若井）はサンポートホール10周年を記念し2014年に創作・初演されたもので（台本：山本恵三 作曲：田中久美子）、今回は海外公演も視野にいれ磨きをかけて成熟した舞台表現をめざし好評を博した。高知では民謡にまつわる実話に因んだオペラ『よさこい節』の25年越しの再演があり、先行する東京公演のキャストをベースに地元の歌手や合唱団を交えて上演を行った。オペラ・えひめ第10回定期は『椿姫』（指揮：加藤完二 演出：井原広樹 ヴィオレッタ：角南有紀）を、四国二期会愛媛支部（第34回）はオペラ・ガラを上演した。1998年来オペラを毎年上演してきた徳島支部は、市の新ホール建設問題のあおりを受け（旧ホール閉館・新ホールは決定された用地が再変更）オペラ上演が叶わず「オペラガラ・コンサート～新ホール完成を願って～」と切ないことになった。高松市の落語ベラちえちりあは『アンナ・ボレーナ』を独自路線で上演、元気である。また上演が困難な規模の町においてもオペラの魅力を伝える努力が続けられている（解説付き「オペラベラべらコンサート」天羽他 野市市）。

四国唯一のプロオーケストラである瀬戸フィルは、地方都市でプロオケを名乗り続けることがどれほど大変でどれほどやり甲斐がある事かを、如実に示している。定期演奏会と銘打った公演こそ年1回であるが、「森のコンサート」（年1回まんのう町）、まらがめ第9への参加、「クリスマスコンサートin坂出」、「ティータムコンサート～ハロウインスペシャル」、プレミアムフライデーに合わせて考案された「プレミアムコンサート」、さぬき市「室内楽コンサート」、玉藻公園内やこども館でのゼロ歳からのコンサート（高松市と連携年2回、10年経過）、イオン高松市サヌキテラスでのミニコンサート（毎月1回2ステージ）、小中学校へのクラシック音楽キャラバン（年4校程度）、美術館、商店街のドーム広場、高松三越での街クラシックin高松への多数回出演など神出鬼没・変幻自在の大活躍で、商店街にオーケストラが現れたり、同じ日に3箇所で開催会をしたりとなんとも凄まじいのである。県内自治体や文化団体とこまめに連携し、声楽家や演奏家を巻き込み、定期演奏会にはロビーコンサートのサービスを付け、若い瀬戸フィルメイトにも活躍場所を提供している。その甲斐あって県内で厚いファン層の獲得に成功し、コンサートは盛況である。勿論実力にも定評があり、2018年には高松国際ピアノコンクールのオーケストラとして期待されている。

ベートーヴェン交響曲全曲連続演奏を5年かけて完遂しその後の方向が注目されていた高知交響楽団は、第158回定期演奏会（指揮：萩原勇一）において全曲アメリカ音楽（バーンスタイン、ガーシュウィン、ウィリアムズ）という新機軸を打ち出して聴衆を沸かせ、続く159回はチャイコフスキー交響曲第5番等ロマン派でまとめた（指揮：前田昌宏）。やっと活躍の場を与えられた管楽器や打楽器も多かった筈だがそれらの楽器メンバーを取り揃えた高響の伝統と厚み、心意気に今更ながら敬意

を表したい。県民に愛されている愛媛交響楽団（第44回 ハチャトウリアン ヴァイオリンコンチェルト他 指揮：大浦智宏 vl. 浅野未希、第45回定期 指揮：上野正博）、高松交響楽団（第117回オールチャイコフスキー・プロ 交響曲第6番他 指揮：松下京介 vl. H. カザジャン 第118回ハンガリー・フランス・ドイツ音楽の午後 指揮：井崎正浩 pf. 鐵百合奈）、徳島交響楽団（第46回定期 指揮：山田啓明）、四国フィル、中村交響楽団など、いずれも安定した活躍を見せている。

バロック演奏団体では松山バッハ合唱団（第47回定期 指揮：橋本真行）が宗教改革500年に因みルターのコラールに関連したバッハのカンタータでプログラムを組み、創立20周年を迎えた高知バッハカンターテンフェライン（指揮：小原浄二）、コレギウム・ムジクム高松（指揮：大山晃）もそれぞれに個性的なコンサート活動を展開した。